

計算物理学B

第12回

偏微分方程式 Part I

藤本 悠輝、野垣 康介
(藤本担当回)

質問等あればメールでも受け付けます:
yuki.fujimoto.phys_at_niigata-u.ac.jp
(_at_ を @ に変えてください)

講義予定

10/07	両名:四則演算	12/09	野垣:モンテカルロ I
10/14	野垣:制御文(for, if)	12/16	野垣:モンテカルロ 2
10/21	野垣:関数	12/23	藤本:常微分方程式 I
10/28	藤本:配列(numpy)	01/13	藤本:常微分方程式 2
11/04	藤本:可視化(matplotlib)	01/20	藤本:偏微分方程式 I
11/11	野垣:数値微分	01/27	藤本:偏微分方程式 2
11/18	藤本:数値積分 ～中間レポート～	02/03	野垣:最適化 ～期末レポート～

あくまで予定なので変更の可能性あり

授業で用いるURL

Google Colab:

<https://colab.research.google.com/?hl=ja>

GitHub上の講義サイト:

https://github.com/nogaki/Computational_Physics_B

今週の教材:

https://github.com/nogaki/Computational_Physics_B/blob/main/week12

第12回 偏微分方程式その1

- 偏微分方程式の境界値問題
 - ヤコビ法、ガウス・ザイデル法、SOR法
- 偏微分方程式の初期値問題
 - FTCS法、陰解法、クランク・ニコルソン法
 - 安定性解析

この講義は以下を参考に準備されています:

<https://github.com/vlvoch/PHYS6350-ComputationalPhysics>

「実践計算物理学」野本拓也、是常隆、有田亮太郎 著(共立出版)

偏微分方程式 (PDE)

偏微分方程式 (Partial Differential Equation; PDE)

例：

- 静電・重力ポテンシャル等に対するポアソン方程式

$$\nabla^2 \phi(x) = -\frac{\rho(x)}{\epsilon_0}$$

- 密度や温度分布についての拡散/熱伝導方程式

$$\frac{\partial u(x, t)}{\partial t} = D \nabla^2 u(x, t)$$

- 変位や振幅に対する波動方程式

$$\frac{\partial^2 u(x, t)}{\partial t^2} = c^2 \nabla^2 u(x, t)$$

- 速度場に対する流体方程式, e.g. Navier-Stokes eqn.

$$\frac{\partial u}{\partial t} + (u \cdot \nabla) u = -\frac{1}{\rho} \nabla p + \nu \nabla^2 u + g$$

偏微分方程式 (PDE)

偏微分方程式 (Partial Differential Equation; PDE)

例:

- 静電・重力ポテンシャル等に対するポアソン方程式

$$\nabla^2 \phi(x) = -\frac{\rho(x)}{\epsilon_0}$$

境界値問題

- 密度や温度分布についての拡散/熱伝導方程式

$$\frac{\partial u(x, t)}{\partial t} = D \nabla^2 u(x, t)$$

初期値問題

- 変位や振幅に対する波動方程式

$$\frac{\partial^2 u(x, t)}{\partial t^2} = c^2 \nabla^2 u(x, t)$$

初期値問題

- 速度場に対する流体方程式, e.g. Navier-Stokes eqn.

$$\frac{\partial u}{\partial t} + (u \cdot \nabla) u = -\frac{1}{\rho} \nabla p + \nu \nabla^2 u + g$$

初期値問題

偏微分方程式の解法

- 有限差分法 (Finite difference method; FDM)
 - 微分を有限差分で近似
 - 他の方法よりシンプル
 - 座標が長方形の格子でうまくゆく
- 有限要素法 (Finite element method; FEM)
 - 系を有限要素に区切る
 - 長方形以外の不規則な形でもOK
- 有限体積法 (Finite volume method; FVM)
 - 系を有限体積に区切る
 - 各セル中では質量が保存

この授業では
これだけ

偏微分方程式の解法

- Pythonではライブラリがないので、自分でコードを書かなければならない!
- ポアソン方程式 $\nabla^2 \phi(x) = -\frac{\rho(x)}{\epsilon_0}$ の境界値問題
→ 有限差分では線型連立方程式 $A\phi = b$
に帰着させる ←計算量との戦い
- 拡散/熱伝導方程式 $\frac{\partial u(t, x)}{\partial t} = D \frac{\partial^2 u(t, x)}{\partial x^2}$ の初期値問題
→ 有限差分では常微分方程式

$$\frac{du_i(t, x_i)}{dt} = \frac{D}{2(\Delta x)^2} [u_{i+1}(t) - 2u_i(t) + u_{i-1}(t)], \quad u_i(t) \equiv u(t, x_i)$$

に帰着させる ←不安定性との戦い

偏微分方程式

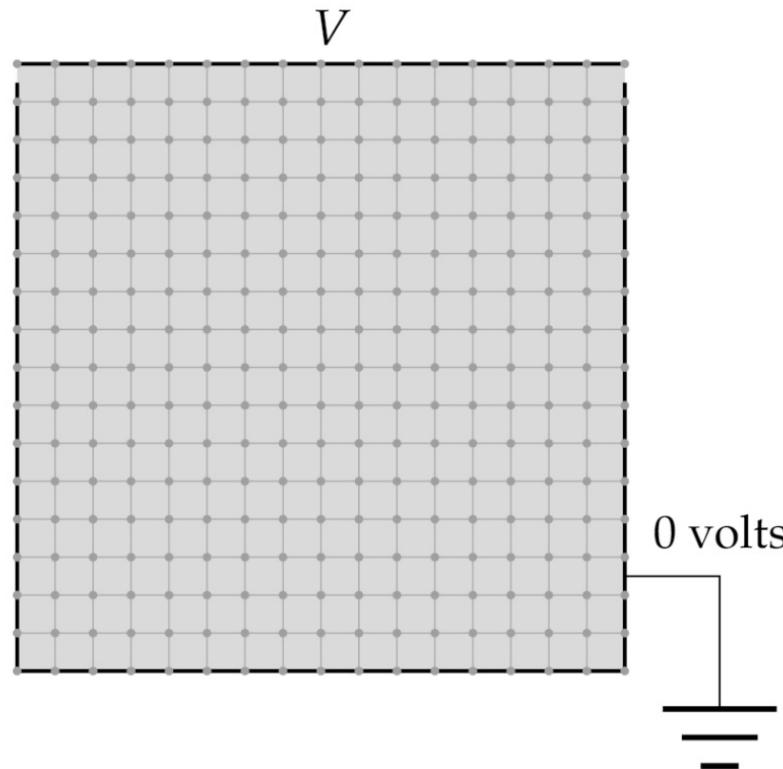
- ポアソン方程式 $\nabla^2 \phi(x) = -\frac{\rho(x)}{\epsilon_0}$ の境界値問題
- 热伝導方程式 $\frac{\partial u(x, t)}{\partial t} = D \nabla^2 u(x, t)$ の初期値問題

境界値問題

- ポアソン方程式 $\nabla^2 \phi(x) = -\frac{\rho(x)}{\epsilon_0}$ は、湧き出しのある場所以外ではラプラス方程式と見做せる:

$$\frac{\partial^2 \phi(x, y)}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \phi(x, y)}{\partial y^2} = 0.$$

- 境界条件: $\phi(x, L) = V$,
 $\phi(x, 0) = 0$,
 $\phi(0, y) = 0$,
 $\phi(L, y) = 0$.
- どうやってポテンシャルの分布 $\phi(x, y)$ を得るか?

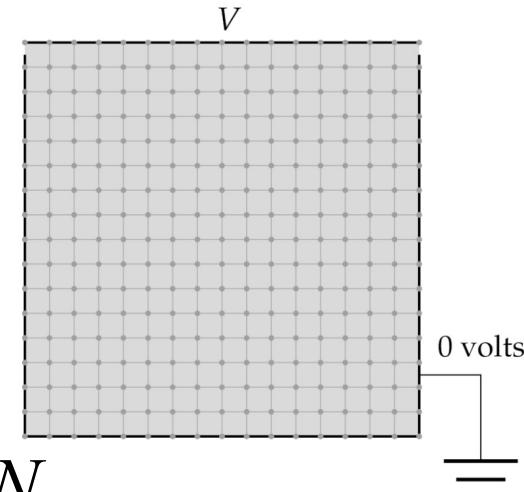


Source: M. Newman, Computational Physics

境界値問題

$$\frac{\partial^2 \phi(x, y)}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \phi(x, y)}{\partial y^2} = 0.$$

$$\begin{aligned}\phi(x, L) &= V, \\ \phi(x, 0) &= 0, \\ \phi(0, y) &= 0, \\ \phi(L, y) &= 0.\end{aligned}$$



Source: M. Newman, Computational Physics

- 空間を $N \times N$ に離散化。各辺 $a = L / N$
- 中心差分を適用：

$$\frac{\partial^2 \phi(x, y)}{\partial x^2} = \frac{\phi(x + a, y) - 2\phi(x, y) + \phi(x - a, y)}{a^2},$$

$$\frac{\partial^2 \phi(x, y)}{\partial y^2} = \frac{\phi(x, y + a) - 2\phi(x, y) + \phi(x, y - a)}{a^2}.$$

- ラプラス方程式は次のようになる：

$$\phi(x + a, y) + \phi(x - a, y) + \phi(x, y + a) + \phi(x, y - a) - 4\phi(x, y) = 0.$$

境界値問題

- ラプラス方程式:

$$\phi(x + a, y) + \phi(x - a, y) + \phi(x, y + a) + \phi(x, y - a) - 4\phi(x, y) = 0.$$

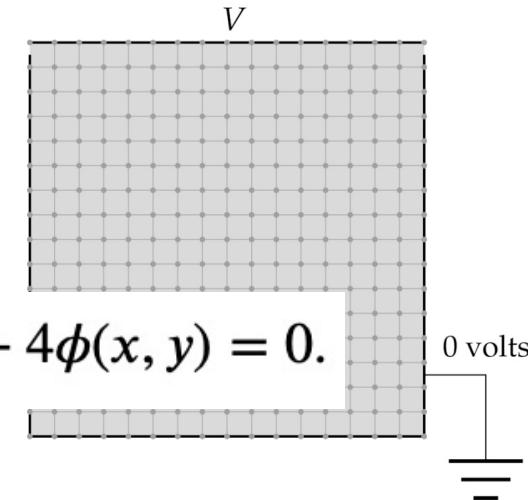
- これは、 N^2 本の線形連立方程式。

つまり、各点での $\phi(x, y)$ をベクトルとみなすと、 $A\phi = b$ という形になっている。

- これをどう解くか？

- 線形代数: LU分解など。計算量は $O(N^6)$
- 反復法: ヤコビ法など。計算量が少ない。

※ Pythonだとfor文が遅いので、反復法よりnumpyやscipyの線形代数のライブラリlinalgを使った方が早い場合がある。



Source: M. Newman, Computational Physics

境界値問題: ヤコビ法

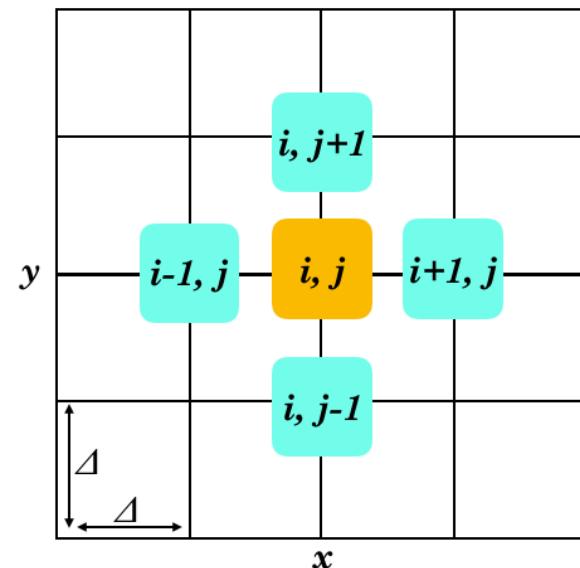
- ラプラス方程式を解く:

$$\phi(x+a, y) + \phi(x-a, y) + \phi(x, y+a) + \phi(x, y-a) - 4\phi(x, y) = 0.$$

- ヤコビ (Jacobi) 法
以下の解法を、所望の精度が出るまで繰り返し適用:

$$\phi_{n+1}(x, y) = \frac{\phi_n(x+a, y) + \phi_n(x-a, y) + \phi_n(x, y+a) + \phi_n(x, y-a)}{4}$$

- 反復法を利用して収束解を得る
方法を緩和法という



境界値問題: ガウス・ザイデル法

- ラプラス方程式を解く:

$$\phi(x+a, y) + \phi(x-a, y) + \phi(x, y+a) + \phi(x, y-a) - 4\phi(x, y) = 0.$$

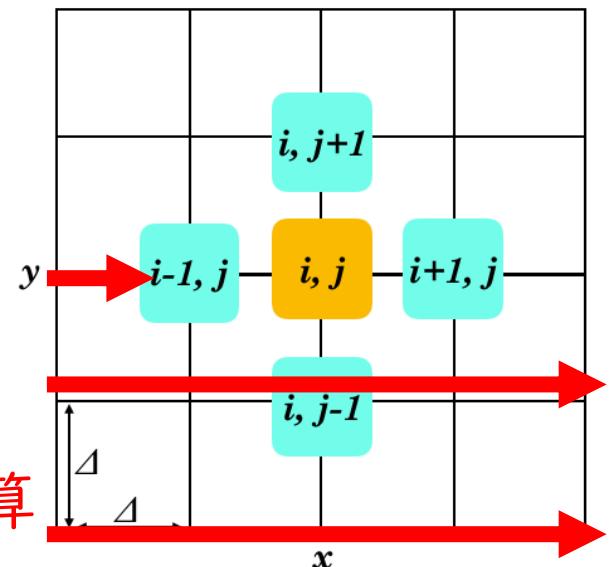
- ガウス・ザイデル (Gauss-Seidel) 法
下三角部分から順に計算:

$$\phi_{n+1}(x, y) = \frac{\phi_n(x+a, y) + \phi_{n+1}(x-a, y) + \phi_n(x, y+a) + \phi_{n+1}(x, y-a)}{4}$$

- ヤコビ法より収束が早い。

※ しかし、右辺にn+1回目の計算結果が現れるので、全てのx,yについて同時に解くことができない。したがって、並列化できずfor文が避けられず、一長一短な側面がある。

矢印の順に下から計算



境界値問題:SOR法

- ガウス・ザイデル (Gauss-Seidel) 法:

$$\phi_{n+1}(x, y) = \frac{\phi_n(x + a, y) + \phi_{n+1}(x - a, y) + \phi_n(x, y + a) + \phi_{n+1}(x, y - a)}{4}$$

- 逐次加速緩和(Successive Over-Relaxation; SOR)法:

$$\phi_{n+1}(x, y) = \phi_n(x, y) + (1 + \omega)[\phi_{n+1}(x, y) - \phi_n(x, y)]$$

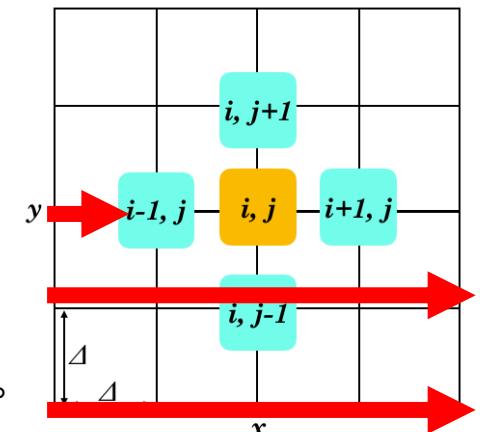
このように、 ω で更新の度合いを加速。つまり、

$$\phi_{n+1}(x, y) = (1 + \omega) \frac{\phi_n(x + a, y) + \phi_{n+1}(x - a, y) + \phi_n(x, y + a) + \phi_{n+1}(x, y - a)}{4} - \omega \phi_n(x, y)$$

- ω : 加速パラメタ。 $-1 < \omega < 1$ で収束。

※ 経験的に決める。

※ 文献によっては上で $1 + \omega \rightarrow \omega$ としたものを使う。



偏微分方程式

- ポアソン方程式 $\nabla^2 \phi(x) = -\frac{\rho(x)}{\epsilon_0}$ の境界値問題
- 热伝導方程式 $\frac{\partial u(x, t)}{\partial t} = D \nabla^2 u(x, t)$ の初期値問題

初期値問題

- 多くの偏微分方程式は場 $u(t, x)$ の時間発展を記述
- 例: 熱伝導方程式、この場合は $u(t, x)$ は温度分布

$$\frac{\partial u}{\partial t} = D \frac{\partial^2 u}{\partial x^2}$$

- $u(t, x)$ の時間発展を記述。初期分布: $u(t = 0, x) = u_0(x)$,
境界条件: $u(t, x = 0) = u_{\text{left}}(t)$,
 $u(t, x = L) = u_{\text{right}}(t)$.
- もし境界条件が静的なら (=右辺が時間依存しない)、
長時間経過後、解は定常分布に近づく

熱伝導方程式での有限差分

$$\frac{\partial u}{\partial t} = D \frac{\partial^2 u}{\partial x^2}$$

- まず空間座標 x を $N+1$ 点に離散化:

$$x_k = ak, \quad k = 0 \dots N, \quad a = L/N,$$

- 位置の2階微分を中心差分で近似:

$$\frac{\partial^2 u(t, x)}{\partial x^2} \approx \frac{u(t, x+a) - 2u(t, x) + u(t, x-a)}{a^2}.$$

- 時間 t の離散化はどうする? よく取られる手法:
 - FTCS 法
 - 陰解法
 - Crank-Nicolson 法

熱伝導方程式: FTCS法

$$\frac{\partial u}{\partial t} = D \frac{\partial^2 u}{\partial x^2}$$

- FTCS (Forward Time Centered Space) 法、すなわち、その名の通り時間微分を前方差分で近似

$$\frac{\partial u(t, x)}{\partial t} \approx \frac{u(t + h, x) - u(t, x)}{h}$$

- 熱伝導方程式の差分方程式は:

$$\frac{u(t + h, x) - u(t, x)}{h} = D \frac{u(t, x + a) - 2u(t, x) + u(t, x - a)}{a^2}$$

- 解 $u(t + h, x)$ には現在時刻の情報 $u(t, x)$ のみ必要:

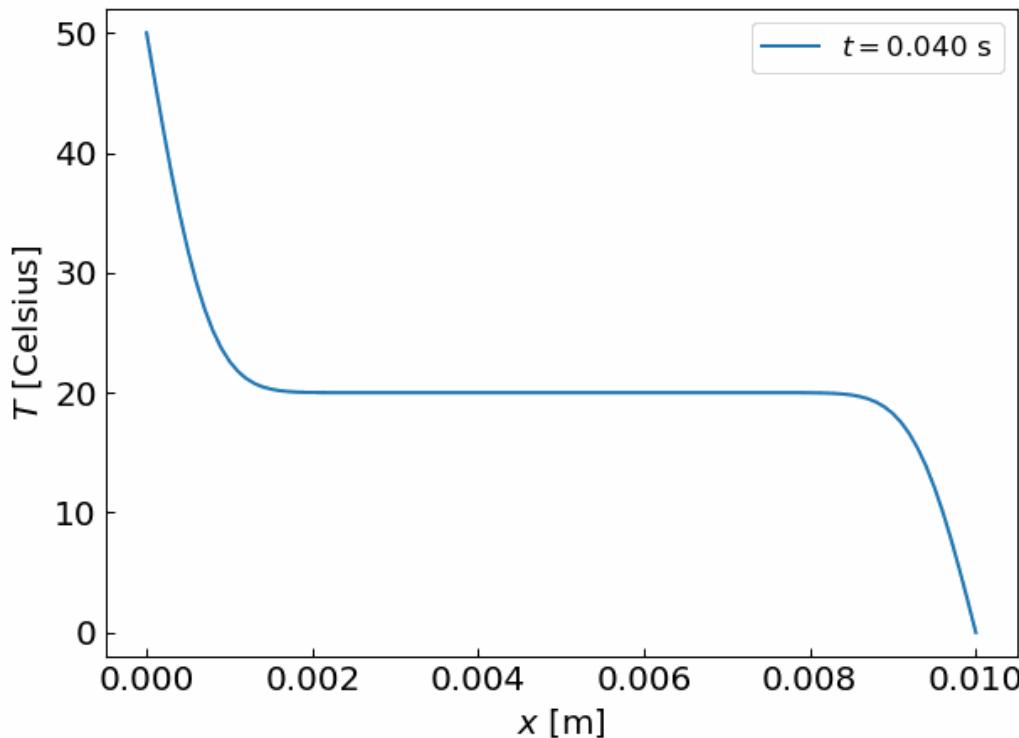
$$u_k^{n+1} = u_k^n + r (u_{k+1}^n - 2u_k^n + u_{k-1}^n), \quad k = 1 \dots N - 1.$$

$$r \equiv \frac{Dh}{a^2}$$

熱伝導方程式の数値解

長さ1cm、初期温度20°Cのステンレスの棒を考える。
この容器の左端は50°Cの温水浴槽に接し、
右端は0°Cの冷水浴槽に接する。ただし、
ステンレスの熱拡散率は $D = 4.25 \cdot 10^{-6} \text{ m}^2 \text{ s}^{-1}$ とする。

Heat equation



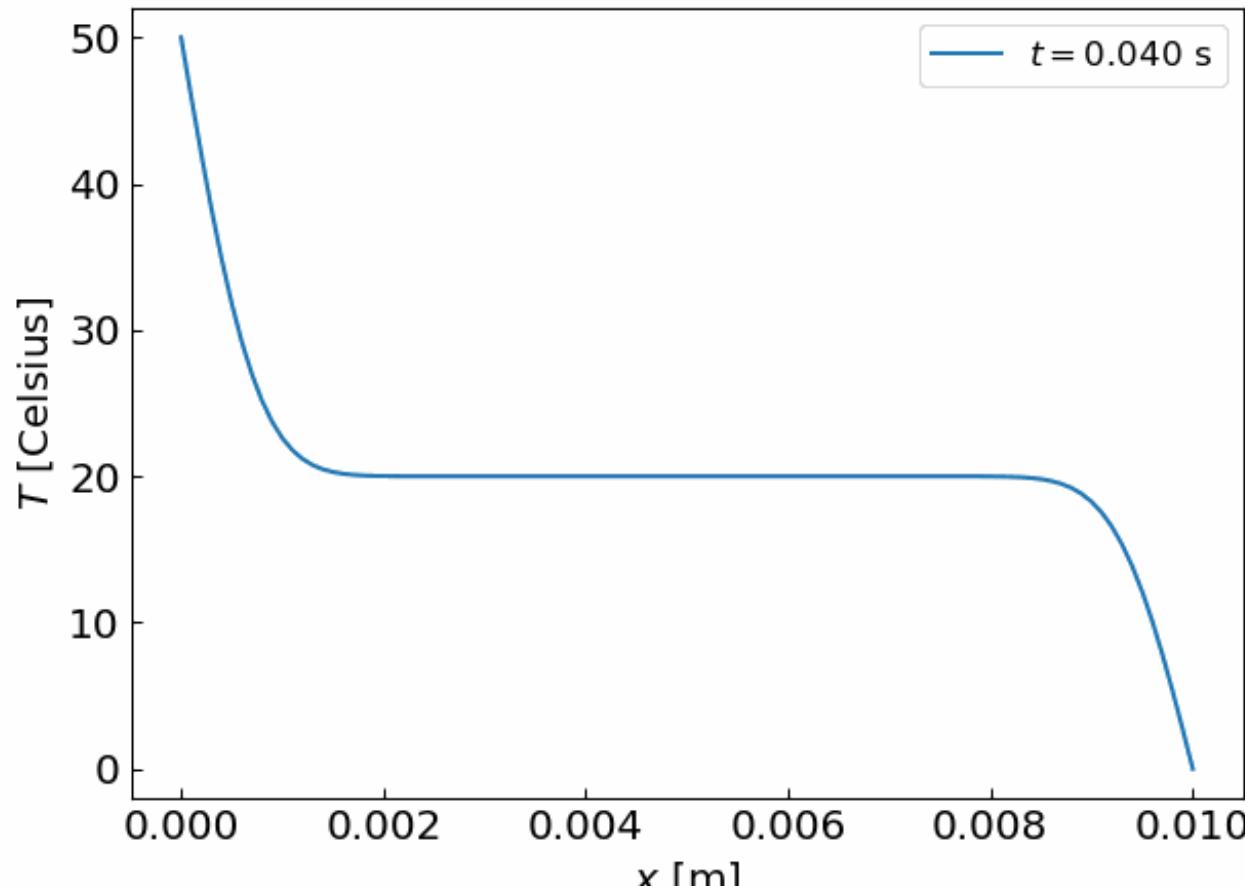
$$\frac{\partial u}{\partial t} = D \frac{\partial^2 u}{\partial x^2}$$

FTCS法の問題点

時間の刻み幅が大きくなると不安定になる。

$\Delta t = 0.001000$ s:

Heat equation

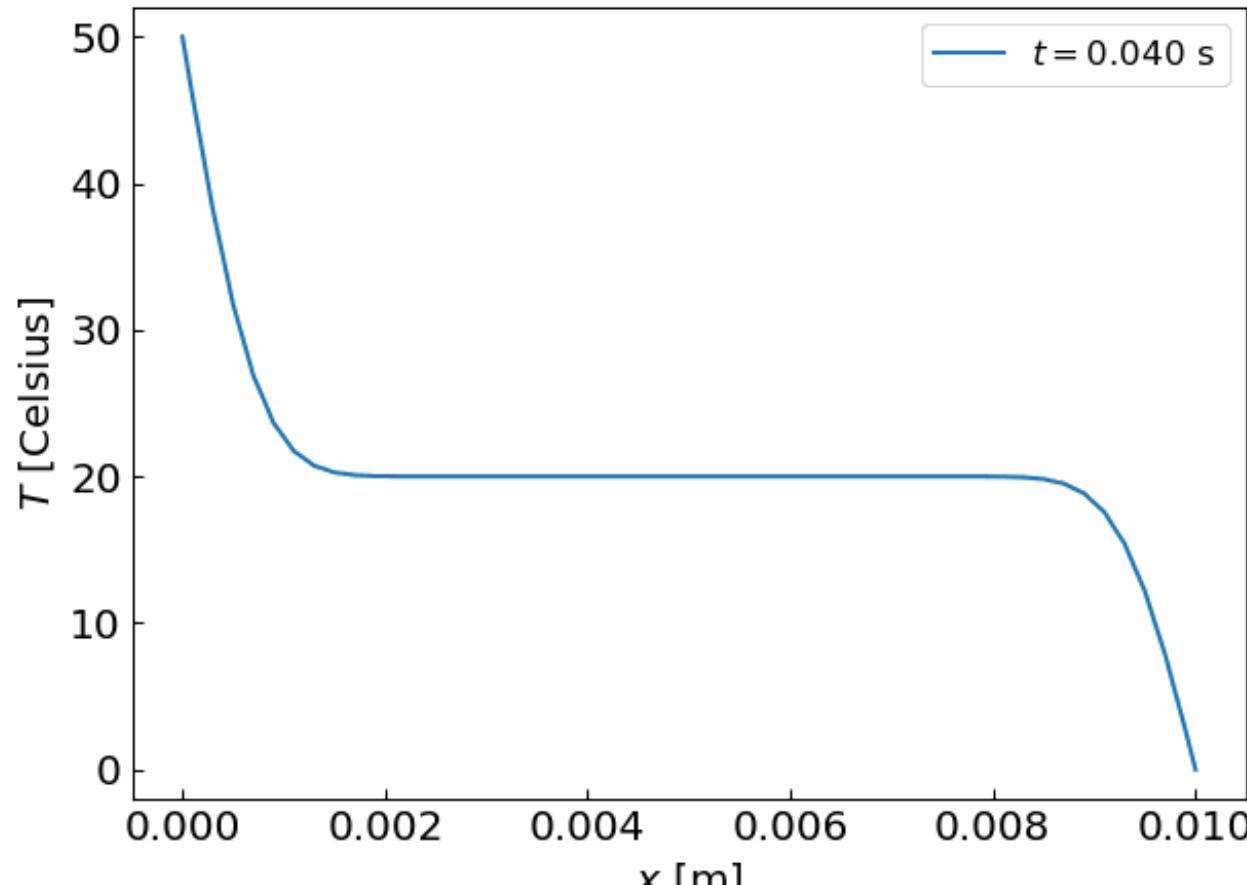


FTCS法の問題点

時間の刻み幅が大きくなると不安定になる。

$\Delta t = 0.001179$ s:

Heat equation

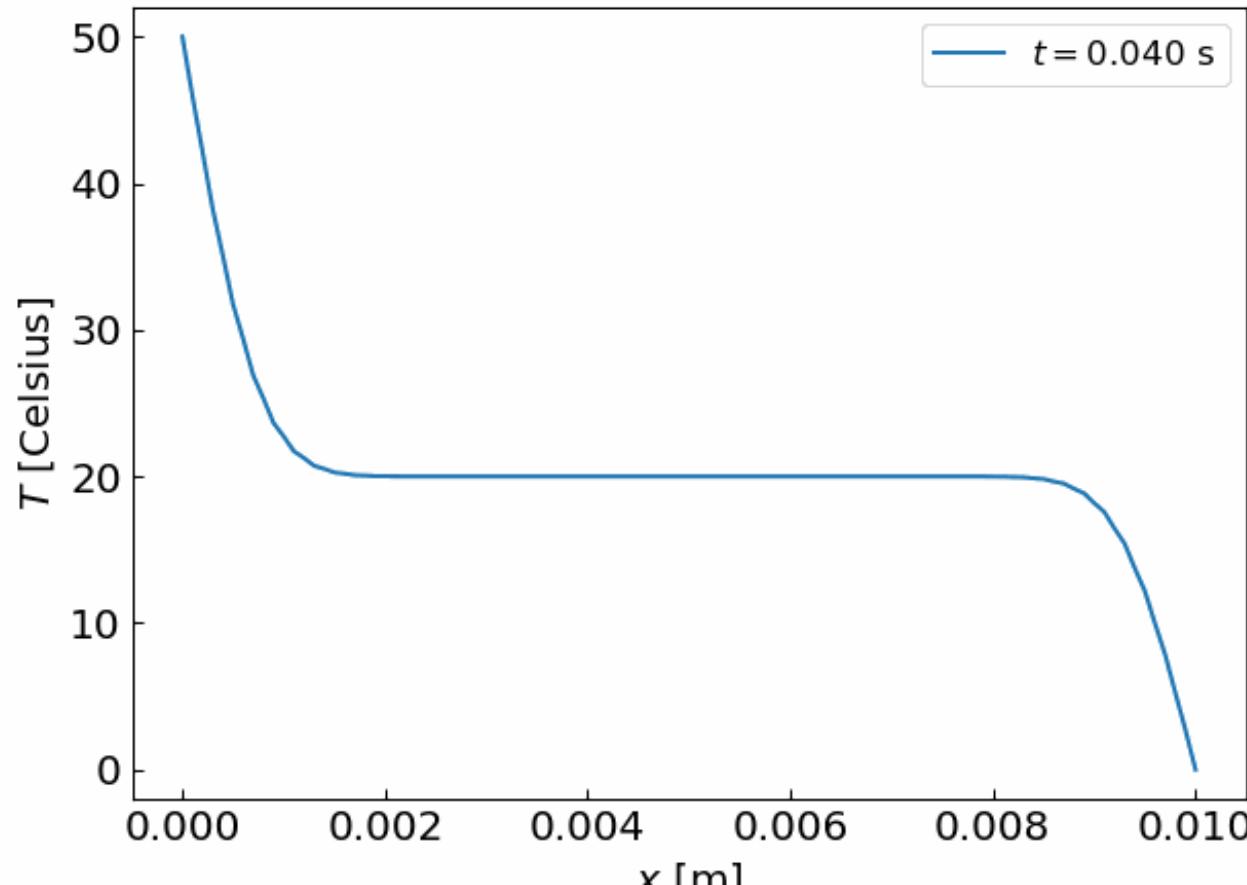


FTCS法の問題点

時間の刻み幅が大きくなると不安定になる。

$\Delta t = 0.001181$ s:

Heat equation

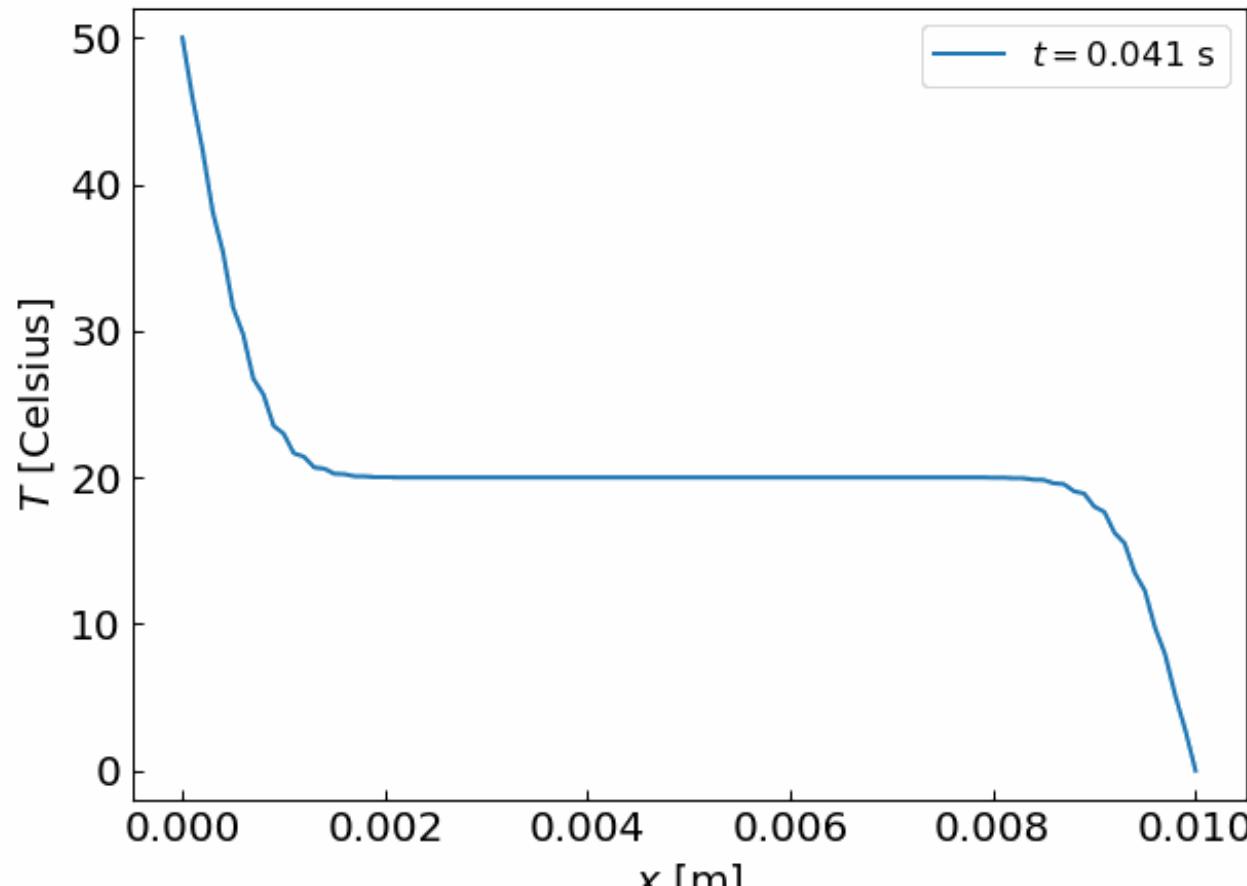


FTCS法の問題点

時間の刻み幅が大きくなると不安定になる。

$\Delta t = 0.001200$ s:

Heat equation



von Neumannの安定性解析

- フーリエ変換: $u(t, x) = \sum_k c_k(t) e^{ikx}$
- 各 k 成分について考える。すなわち、 $u(t, x) = c_k(t) e^{ikx}$
これを差分方程式

$$\frac{u(t+h, x) - u(t, x)}{h} = D \frac{u(t, x+a) - 2u(t, x) + u(t, x-a)}{a^2}.$$

に代入すると

$$u(t+h, x) = [1 - 4r \sin^2(ka/2)] c_k(t) e^{ikx} \quad \text{となる。}$$

- つまり、

$$c_k(t+h) = [1 - 4r \sin^2(ka/2)] c_k(t), \quad c_k^{n+1} = [1 - 4r \sin^2(ka/2)]^n c_k^0$$

- $r < 1/2$ では収束するが、 $r > 1/2$ では発散!

$$r \equiv \frac{Dh}{a^2}$$

FTCS法の不安定性

- 一般に、空間の n 階微分を含む偏微分方程式の FTCS法による解が安定になるための条件は：

$$\Delta t \lesssim \frac{(\Delta x)^n}{D}$$

- 長時間のシミュレーションだと計算量増大.....
- 避けるための方法：
 - 陰解法
 - Crank-Nicolson法

$\frac{\partial u}{\partial t} = D \frac{\partial^2 u}{\partial x^2}$ の陰解法

- 時間微分を前方ではなく後方差分で近似

$$\frac{\partial u(t+h, x)}{\partial t} \approx \frac{u(t+h, x) - u(t, x)}{h}$$

- 熱伝導方程式の差分方程式は：

$$\frac{u(t+h, x) - u(t, x)}{h} = D \frac{u(t+h, x+a) - 2u(t+h, x) + u(t+h, x-a)}{a^2}$$

$$u_k^{n+1} = u_k^n + r(u_{k+1}^{n+1} - 2u_k^{n+1} + u_{k-1}^{n+1}), \quad k = 1 \dots N-1$$

- 解 $u(t+h, x)$ を得るには三重対角行列方程式を解く

$$-ru_{k-1}^{n+1} + (1+2r)u_k^{n+1} - ru_{k+1}^{n+1} = u_k^n, \quad k = 1 \dots N-1$$

※ ここでは `scipy.linalg.solve_banded` で呼び出して解く。線形代数には FortranのLAPACKという優れたライブラリがあるので、それを使う。

- von Neumann安定性解析：全ての r で安定

$$\frac{\partial u}{\partial t} = D \frac{\partial^2 u}{\partial x^2}$$

Crank–Nicolson法

- 時間微分を前方と後方差分の”平均”で近似

$$\frac{\partial u(t, x)}{\partial t} \approx \frac{1}{2} \left[D \frac{\partial^2 u(t+h, x)}{\partial x^2} + D \frac{\partial^2 u(t, x)}{\partial x^2} \right]$$

... 時間積分の台形則に対応。

- 熱伝導方程式の差分方程式は：

$$\frac{u(t+h, x) - u(t, x)}{h} = \frac{D}{2} \frac{u(t+h, x+a) - 2u(t+h, x) + u(t+h, x-a)}{a^2} + \frac{D}{2} \frac{u(t, x+a) - 2u(t, x) + u(t, x-a)}{a^2}$$

- 陰解法同様、解 $u(t+h, x)$ を得るには三重対角行列方程式を解く必要がある：

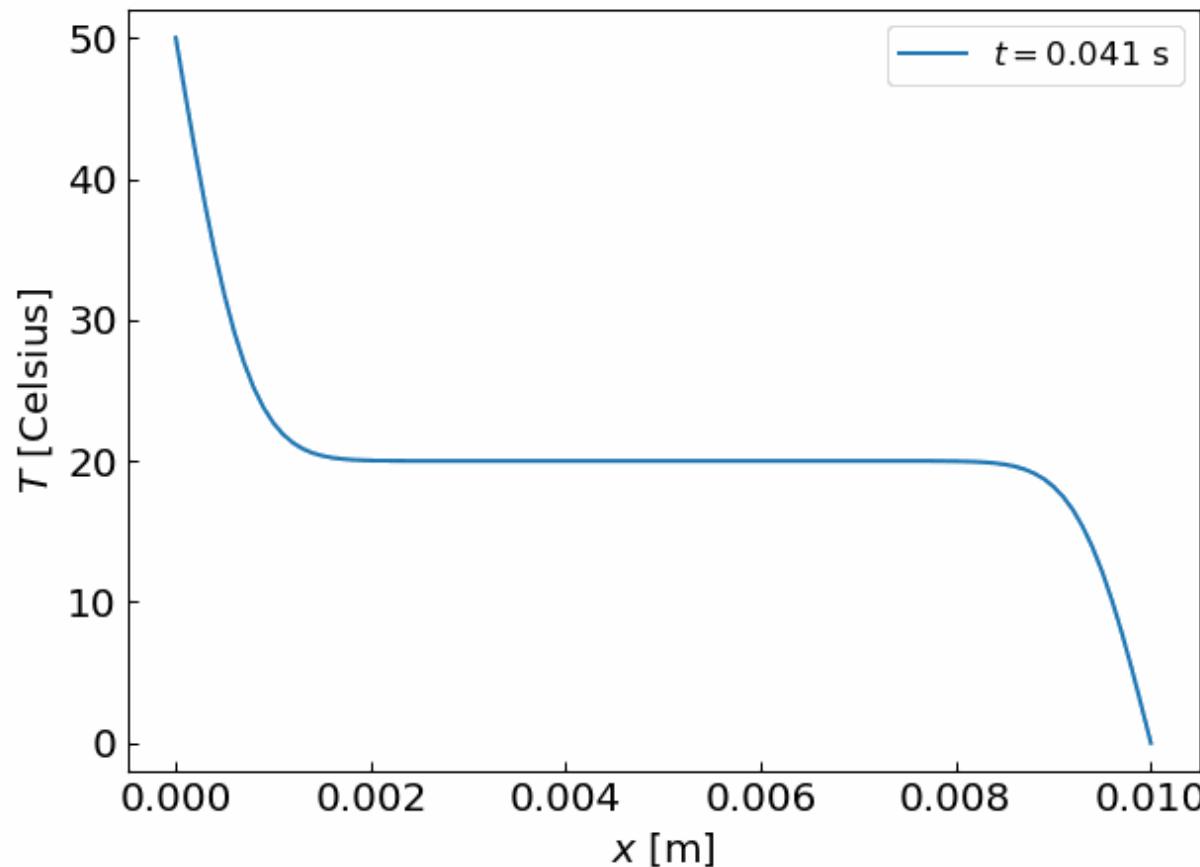
$$-ru_{k-1}^{n+1} + 2(1+r)u_k^{n+1} - ru_{k+1}^{n+1} = ru_{k-1}^n + 2(1-r)u_k^n + ru_{k+1}^n, \quad k = 1 \dots N-1.$$

- von Neumann安定性解析：全ての r で安定

陰解法による数値解

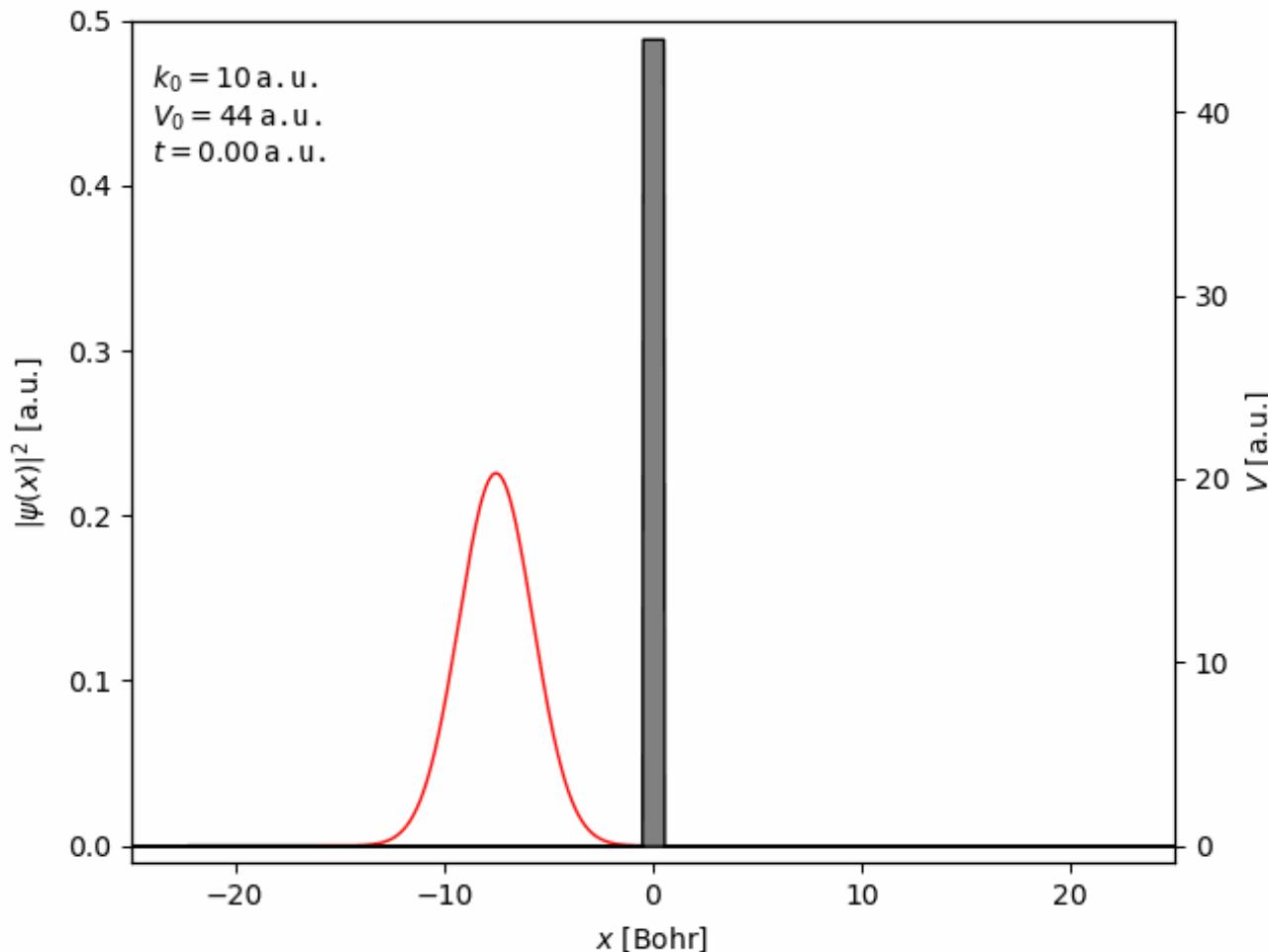
FTCSが破綻する大きい時間の刻み幅でも動作

Heat equation



次回予告

量子力学をやります。



実習タイム

Crank-Nicolson法で空間1次元の波動方程式

$$\frac{\partial^2 u(x, t)}{\partial t^2} = c^2 \frac{\partial^2 u(x, t)}{\partial x^2}$$

を解いてみよう。

必要な情報は今週のノートブックにあるので、それを参考のこと。

答えは次回の講義で解説する。